

国立国語研究所学術情報リポジトリ

北海道調査の概要

著者	米田 正人
雑誌名	北海道における共通語化
ページ	1-3
発行年	1991-03
シリーズ	国立国語研究所研究発表会 ； 平成2年度
URL	http://doi.org/10.15084/00002892

1. 北海道調査の概要

情報資料研究部第二研究室

米田 正人

国立国語研究所では、昭和33年度から昭和35年度にかけて、北海道における共通語化の過程に関する実態調査を行った。この調査は、当時東京語に近いといわれていた「北海道共通語」がどのようにして成立しつつあるのかを明らかにし、日本全国の共通語化の方策と共通語教育の方針をたてるのに有効な知識を得ることを目的としたものであった。その後、昭和61年度から昭和63年度にかけて、上記調査の成果をふまえつつ、新しい観点にたった社会言語学的調査を実施し、これまでにその整理集計作業をほぼ終えることができた。今年度の研究発表会ではこれらの調査結果を比較し、新しく行われた調査によって得られた知見を明らかにしてみたいと考えている。ここでは、以降に続く調査結果の分析に先立って、これら2度にわたる調査の概略を述べることにする。なお、以下では昭和33年度から35年度に行われた1回目の調査を「前回調査」、昭和61年度から63年度に行われた2回目の調査を「今回調査」と呼んで区別することとする。

1. 前回調査について

この調査は、「北海道の言語の実態と共通語化の実態（代表者 岩淵悦太郎）」という研究題目で、文部省科学研究費（総合研究）の交付を受けて行われたものである。

(1) 研究組織

岩淵悦太郎、柴田武、野元菊雄、上村幸雄、徳川宗賢（以上、国立国語研究所）、五十嵐三郎（北海道大学）、長谷川清喜、佐藤誠（以上、北海道学芸大学）、石垣福雄（北海道立札幌北高校）

(2) 調査の種類

① 1世、2世、3世調査（調査Ⅰ）……第1世から第3世への変化

3世代のそろった家族に対して、世代による変化を言語の各面から記述し、いわゆる「北海道共通語」の形成過程を調べた。被調査者は8家族24名、すべて男性。

② 3世調査（調査Ⅱ）……北海道共通語の成立

札幌（都市）・帯広（農村）・釧路（海岸）の各市在住の3世に対する、「北海道共通語」成立の検証調査。被調査者総数は161名。

③ 富良野調査（調査Ⅲ）……世代の違いと年齢の違い

年齢差と世代差のどちらが共通語化の要因としてきいているかを、空知郡富良野町で調査。10代2世、10代3世、30代2世、30代3世、各50人を調査。

④ 吉野・浦臼・豊頃調査（調査Ⅳ）……集団移住地の特色

富良野調査の結果との比較を前提として、集団移民的性格をもった上記地域に関し

て、特に3世の言語の違いを中心に調査。富良野町(50)、樺戸郡新十津川町(16)、中川郡豊頃村(20)、樺戸郡浦臼村(16)で実施()内は被調査者数)。

⑤高校調査(調査V)……北海道内部の地域差

北海道の言語の地域的な差異をつかむことを主目的に、広く北海道各地の高校生に対して実施された調査(40校, 210名)。なお、比較資料として東北地方でも調査が行われた(6校, 30名)。

⑥吟味調査(調査VI)……調査結果の吟味

調査者の個人的な偏りが、I～Vの調査結果におよぼす影響を調査

以上が前回調査の構成を概略したものである。調査項目の詳細および結果については国立国語研究所報告27, 「共通語化の過程——北海道における親子三代のことば——」(国立国語研究所編, 1965年, 秀英出版刊)を参照されたい。

2. 今回調査について

この調査研究も前回調査同様, 「北海道における共通語化および言語生活の実態(代表者 江川清)」という研究課題名で, 文部省科学研究費補助金(総合研究(A))の交付を受けて行われた。

(1) 研究組織(構成, 所属は調査時点のもの)

江川清, 野元菊雄, 南不二男, 杉戸清樹, 佐藤亮一, 沢木幹栄, 小林隆, 相沢正夫, 水野義道, 米田正人(以上, 国立国語研究所), 池上二良(札幌大), 小野米一, 南芳公, 吉見孝夫(以上, 北海道教育大), 菅泰雄(旭川高専), 徳川宗賢, 真田信治(以上, 大阪大), 高田誠(筑波大), 志部昭平(千葉大), 日向茂男(東京学芸大), 鈴木敏昭(富山大), その他研究協力者多数

(2) 研究目的

本調査研究の主な目的は以下の2点である。

- a. 社会言語学ならびに言語行動研究の観点にたつて, 現在の北海道民の言語および言語生活を調査する。特に農村型地域社会の事例として富良野市を, 都市型地域社会として札幌市をとりあげ, それぞれの地域社会における住民の言語および言語生活の実態をとらえ, 両者を対比的に考察する。
- b. 前回調査の追跡調査を行うことにより, 語彙・文法・アクセント・音韻などの諸側面について, その後の変化の実態を明らかにする。

(3) 調査の種類

①富良野市民調査(昭和61年度実施)

7) 継続調査

農村型地域社会の一事例として, 前回調査の行われた富良野市において, 無作為に抽出された400名の被調査者に対して, 個別面接調査と留置アンケート調査の併用方式で調査を実施した。回答者総数は299名(面接, アンケート両方の回答

を得たものの数。ただし、アクセントについては 300名を分析対象とした）。語彙・文法・アクセント・音韻、言語行動、言語意識、言語生活、社会言語学的属性など、質問項目は多岐にわたる。

イ) パネル調査

前回調査の回答者 200名のうち、消息の判明した 126名に対して追跡調査を実施した。回答者総数は 106名

前回の調査項目のうち、アクセントを除く全ての質問項目を調査した。

ロ) 事例調査

アクセントに関する詳細な事例調査として、4家庭19名に対して実施した。

②札幌市民調査（昭和62年度実施）

富良野市で行った農村型地域社会の調査と比較するため、都市型地域社会を代表する札幌市において、無作為に抽出された 500名の被調査者に対して、個別面接調査と留置調査の併用方式で調査を実施した。回答者総数は 351名（アクセント項目回答者は 350名）。

富良野市民調査（継続調査）とほぼ同様の質問項目を調査した。

③高校生調査（昭和63年度実施）

北海道各地における若い世代の言語変化とその現況を概観するため、前回の高校調査の対象40校に、都市部12校を加えた52高校の1年在学生を対象に実施した。回答者総数は 2,682人（1校平均52名程）で、語彙項目50、文法項目20、言語意識に関する項目5の合計75項目について、アンケート方式（回答はマークシートに記入）の通信調査を行った。

④札幌在住単身赴任者調査（昭和62年度実施）

札幌市在住の単身赴任者に対して、語彙および言語生活関係の項目をアンケート方式で調査した。調査票の配布、回収は「全国単身赴任者の会」に委託。

3. 調査結果の比較について

今回調査は、「共通語化」を中心テーマとして、前回調査から27年間という年月を隔てて行われた経年調査という側面が大きい。従って、基本的には前回調査の質問項目をできるだけ踏襲するよう調査が企画されているが、新しい観点にたった質問項目を追加したり、現在では意味を成さなくなったと思われる項目を除外したり、また、被調査者の抽出を前回とは異なった方法で行うなど、変更を加えた部分もある。それらの影響により、以降の発表では次のような観点での比較が中心となろう。

(1) 富良野市民調査のうち、パネル調査の前回調査と今回調査の比較

(2) 高校調査（前回調査）と高校生調査（今回調査）の比較

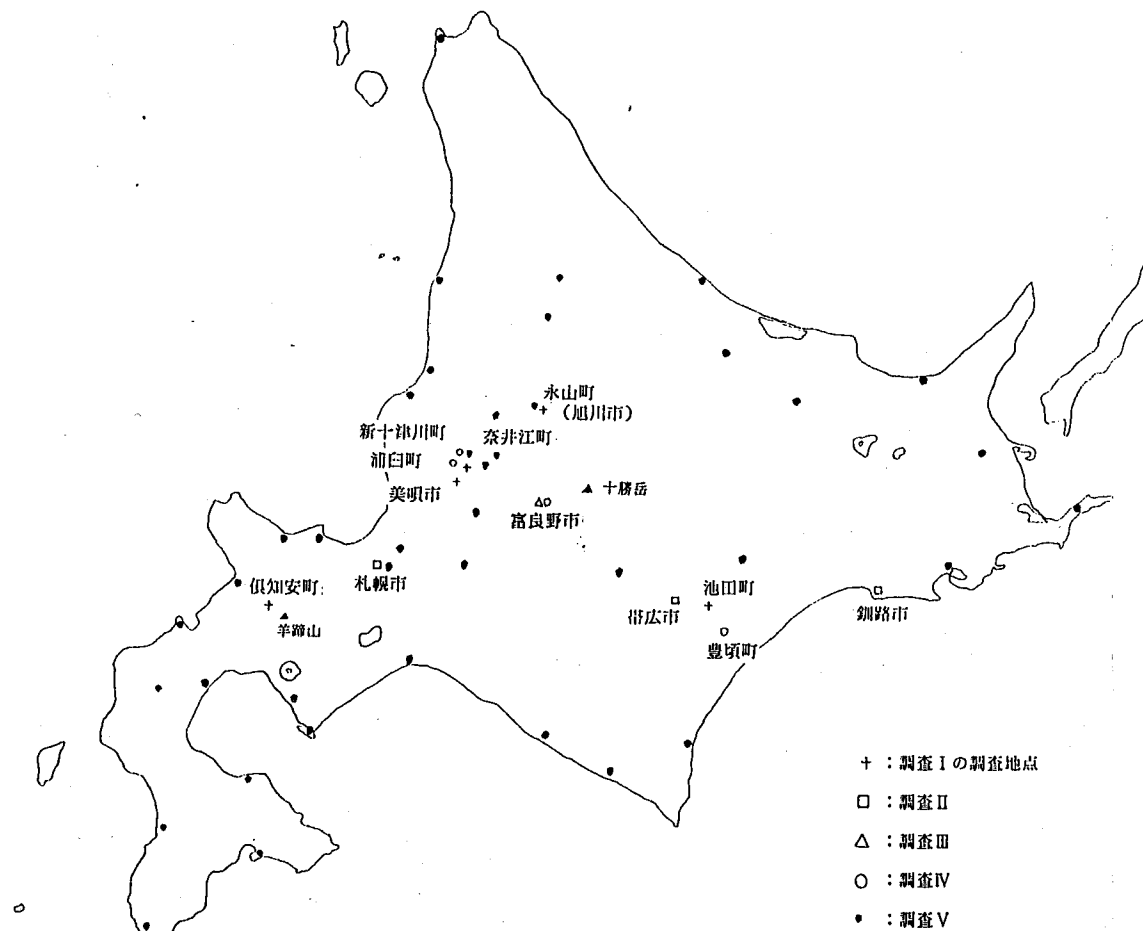
(3) 農村社会と都市社会における言語および言語生活の比較という観点で、富良野市民調査（継続調査）と札幌市民調査の比較

1. 北海道調査の概要

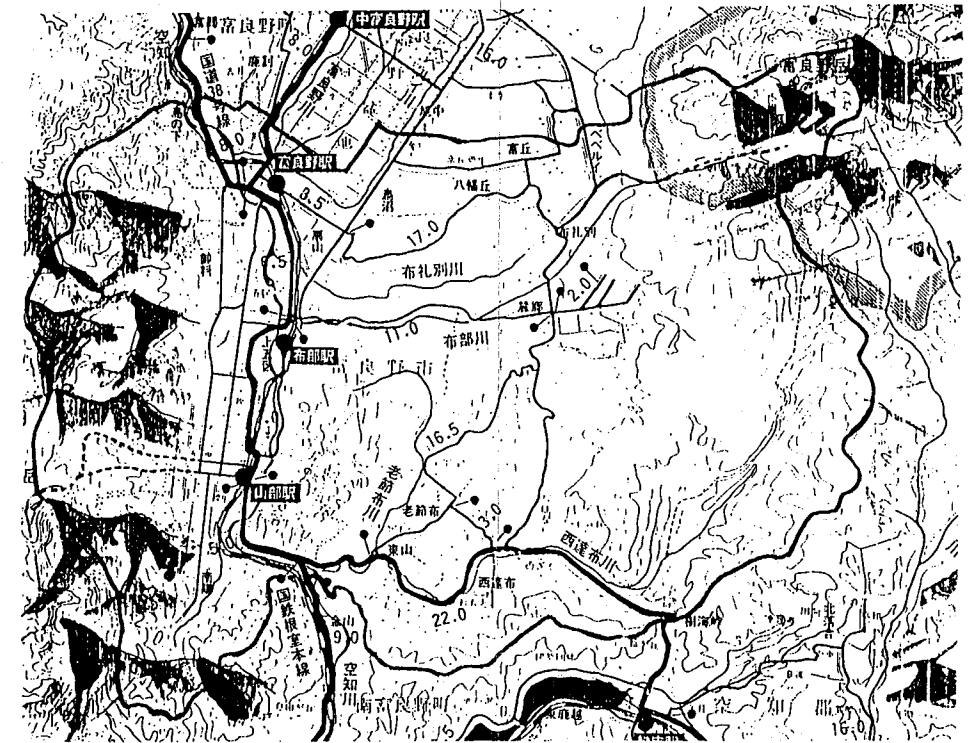
補足資料

平成3年3月27日(水)
情報資料研究部第二研究室
米田 正人

1. 北海道調査(前回調査)の調査地点



2. 富良野市民調査(今回調査)



3. 札幌市民調査(今回調査)

